

ダイテス領攻防記

登場人物紹介

ゲイン

「強欲王」と呼ばれる
東の国
カイナンの王。

トゥール

「無敗王」と呼ばれる
西の国
エチルの王。

ナリス

「虐殺人形」と呼ばれる
南の国
ハヤサの王。

トリス

コシスの弟。
王太子親衛隊の
隊長。

コシス

マティサの忠実な臣下。
家督を弟に譲り、
主について
ダイテスまで来た。

クラリサ

ミリアーナの侍女。
BL好きの
貴腐人でもある。

水谷美有

みずたに みゆう
腐女子人生を謳歌していたOL。
事故で命を落とし、
ミリアーナとして転生。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
廃嫡されて、ダイテスに
婚養子としてやって来た。
「黒の魔将軍」と
恐れられている。

ミリアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵令嬢。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。

目次

ダイテス領攻防記

7

影の指し手は駒こまを集める。

267

ダイテス領攻防記

プロローグ マティサへの告白

私ミリアーナ・ダイテスには前世の記憶があります。

前世というのはですね、簡単に言いますと、生まれ変わる前の生のことです。生き物には魂というものがありまして、死んだあとにこれが体から抜け出て、新たな命に宿って再び生まれてくるのです。つまり、私は転生したのです。

ええ、信じられないのも無理はないと思います。私もまさか、自分が体験するとは思いませんでした。

生まれ変わる前の私は、水谷美有というごく普通の女性でした。二十四歳の時に事故で死にまして、今の私として生まれ変わったわけです。

そして生まれたこの場所は、前世の私から見ると異世界でした。

世界というのはひとつではなく、時空を超えて無数に存在するものなのです。

この世界は——はつきり言って文化程度が、前にいた世界のヨーロッパという大陸にあった国々の中世期ぐらい、およそ数百年前ぐらいの感覚です。

そのかわり、ここには魔法とかがありますけど。精霊もいますし。前世では、魔法はお伽噺の中に

しかありませんでした。

それで、生きにくいんですよ、この世界。あなたは生まれた時からこうだったので不自由も感じないでしょうが、私が前にいた世界は文明がもつと発達していて、便利で豊かでした。だからこの不自由さをどうにかしようと、前世の記憶に従っている作りしました。

私が作ったものはすべて原型が前の世界にありまして、それをこっちの世界でできるかぎり再現したものです。

はい？ 前の世界では賢者だったのだったって？

違いますよ、一般人です。こちらふうに言えば平民ですかね。

平民がどうしてこんな知識を持っているのだったって？

そこなんですよ。義務教育といまして、私が住んでいた国では全国民がある程度の教育を受けられたんですよ。

え？ なんでそこまでするのだったって？

たぶん、優秀な労働力を育てるためだと思います。平民が国を支えていたんです。つまり、市井から国を発展させていく人たちが生まれるんですよ。人材は、優秀であればあるほどいい。

そもそも政治形態がね、王政じゃありませんから。国民の中から為政者が選ばれるんですよ。

誰もが公平に教育を受けて知識を得られ、本人の努力しただいで様々な機会を与えられるんです。前世の私が暮らしていたのは、そんなところでした。

ですから、私はごく普通の人間なんです。天才じゃありません。

というか、自作のBL小説を婿に読まれるって、どんな羞恥プレイですか！
ボーイズ・ラブ、すなわちBL。

BLを愛する少女は、前世で『腐女子』『貴腐人』と呼ばれていました。つまり、私のことです。
「いやあああん！ BL文化を異世界に普及させるのが私のライフワークなのよおおおお！」
「びえる？ なんだそりゃ？ まあいいか」

婿様はぼいっと冊子をサイドテーブルに放り投げます。

そして、飛びついて冊子を取り返そうとする私を軽々と捕まえました。

「わかった——こういうのが好みか。期待には応えてやらねえとなあ」

捕獲されました！

食われるうろうう！

そのまま寝台に押し倒されて——ちょっと待ってください！——こういうのが好んで、今からそれを実演する気ですか？ BLでの濡れ場の再現って——ドコにナニをいれる気だっ！

「いやああああ！ 違うからっつ！ 妄想と現実は違うから！」

そういう体験は一生したくないですうろうう！

私が必死に抵抗しているのにびくともしないって、どーゆー腕力ですかー！

「わかってる、わかってる。ちゃんと孕むようにしてやる。楽しませてやんよ」

そっち方面の危機は逃れられたようです。でもっつ、それでもっつ、あれに書いた内容というのは——趣味に任せた、けっこうハードなやつだったはずですよ。

「やーああああああ！ 初心者にはハードル高すぎ！ 婿様、求めるレベルが高すぎるうろうう」

前世の私は、清い身で短い一生を終えました。これは未体験ゾーンです！ まあ耳年増でしたけどね！ 主に腐ってました。BL方面の知識には自信あります。

「あ？ 初めてか？ まあ、手加減はしてやるよ」

食われました。

大人の階段を全力疾走で駆け上らされた感じですよ。

いえ、マジで。私は名実ともに人妻になりました。

あうう、あちこち痛い……どこが手加減してるんですかー！

家の婿様は絶倫でした。

朦朧とする意識の中で、婿様が「もう朝か」と呟いて離れるのがわかりました。たぶん、私はそのまま失神したのだと思います。

だからね、初心者に朝までって求めるレベル高すぎですよ。獣か！
身がもたないですうろうう！

第一章 墮ちたる月と異郷の花

ミリアーナが前世の記憶を告白する数日前、オウミ王国の北の辺境ダイテス領に向かう一行がいた。

男子の跡継ぎがないダイテス領主は娘に婿を迎えることを望み、国王はそれに応えて人柱——否、婿を選び、王命としてその者に婚姻を申し付けた。かくて生贄——もとい婿として、マテイサは王都からド辺境であるダイテスに向かっている。

王都からダイテスまでは、徒歩で五日ほどかかる。これは、王都から西と東の隣国との国境線に行くのと大差ない。また、南の隣国の方が近いぐらいだ。いつそ自分で馬に乗って駆けた方が速いのだが、マテイサは馬車に押し込まれている。

とりたてて急ぐ必要のない旅である。よって荷物の運搬や馬の負担も考え、徒歩と変わらない速度で移動している。しかし、マテイサはいいかげん飽き飽きしていた。

馬車の窓から見える景色は実にのどかだ。建物も見当たらない。どこまでも手付かずの大自然が広がっている。

王都からつけられている護衛の騎士が目障りだった。馬車を囲むのは、護衛とは名ばかりの監視役なのである。生贄の機嫌も悪くなるうというものだ。

(囚人の移送かよ、胸糞悪い)

心の中で毒づく。自分が危険物であることは重々承知しているが、気分のいいものではない。

「なんにもねえな。おい、これで道はあつてんのか?」

マテイサは同席しているコシスに声をかけた。腹心である彼は小さく頷く。

「街道はまだ続いております。これからまいりますダイテス領は、辺境でございますので」

「ふん……」

マテイサは、窓枠にだらしなく頬杖をついた。

「だっ広い、どん詰まりの辺境か」

「……三方を険しい山に囲まれております。その分、隣国から攻められたことはありません」

「だが、こちらからも攻められねえ」

「……はい」

オウミ王国の最北端。隣国との国境に接しているとはいえ、その国境は険しい山脈である。竜骨と称される山脈に、抱きすくめられているかのような土地がダイテスだ。オウミの国土となつて以来、一度も攻められた例がない。

そのかわり、ダイテス側からどこへも手出しはできない。すなわち、ここにいるかぎりは武功の立てようがない。

マテイサは自嘲する。

「はっ、露骨だなあ、おい」

「……まことに」

そんなところに行かされるということは、表舞台から引つ込めということだ。今頃、王妃は狂喜しているだろう。

「クソ婆が」

「我が君、母君のことをそのように」

「言うな、婆の差し金に決まってるんだろ。はっ、ざまあねえな、都落ちかよ」

オウミの第一王子であるマティサが公爵家の婿養子に入ることとなったのは、王妃リサーナが王に進言したためである。多くの貴族を巻き込んで、『マティサは王太子たる資格なし』と騒いだのだ。王はこの声を無視できず、マティサを廃嫡した。

これにより、王太子は同母弟の第二王子ジュリアスとなった。

それでも本来ならマティサを王子として扱うか、公爵として新しい家を起こして臣下に下らせるのだが——王の判断はそのどちらでもなかった。ダイテスという、王都ではまったく無名の公爵家への婿入り。この微妙な沙汰に、マティサは苦笑するしかない。

「コシス、手前は俺についてこなくともよかったんだぞ」

「我が君、わたしは生涯、主を変えるつもりはありません」

「……物好きだな」

「はい」

マティサはコシスを巻き込むつもりはなかった。使える男なので引き取り手はいくらでもあった

だろうに、さっさと荷造りをしてついてきてしまったのだ。働きに酬いてやることもできないというのに、コシスは今後もマティサに忠実に仕える気でいるらしい。心苦しいほどの忠誠心だ。

「……ダイテスの資料はあるか？」

マティサは、ダイテスのことを何も知らない。領地の位置と領主の爵位、それに家の成り立ちぐらいはわかるが、当代のことだと、花嫁となる令嬢のことすら知らない。それぐらい急な話だったのだ。

「ございます。舅しやくわいとなられます当主はグライム・ダイテス殿。奥方は早くに亡くなられ、姫君が一人おられるだけです。この姫君は辺境におられるせいか社交界に顔を出すことはなく、お姿まではわかりません。歳は十八で、名はミリアーナ様です」

コシスは鞆かばんから羊皮紙ようひしの束を取り出した。

「……実はわたしも調べるまでは知りませんでした、ここ十年ほどでダイテスは非常に変わっておりまして……これをそのまま信じていいものかどうか。ご自分で確かめられますか？」

「あん？」

マティサは羊皮紙を受け取り、目を通し始めた。そこには、にわかには信じられないことが書いてあった。

特に目を引いたのは——

「塩、だど？ 山ン中だよな？」

「塩です。岩塩——も産出されています、『えんこ』なるものがあるそうです」

『「えんこ」？ なんだ、そりゃ」

「海より濃い塩分を含んでいる湖だそうです。以前は『死の湖』と呼ばれていたのですが、塩が取れるとわかり、ダイテスは今では国内唯一の塩の産地となりました」

「我が国で塩が作れるとはな……」

塩が作れるとは希少な土地だ。オウミには海がない。よって塩はとれず、海外からの輸入でまかっている。ここ数年は、オウミの南にある海に面した国ハヤサから輸入している。

マティサはさらに資料を読み進め、唸った。

「……収益が跳ね上がってんのは、そのせいかな」

ダイテスの収入は、この十年のうちにとんでもなく増えていた。

「……いえ……それもありますが、鉄鉱脈の発見と農地の拡大、工業の発達も……」

「ちよつと待て！ んだこりゃあ、数字間違っていないか？ 税率上げてないのにこの数字か？ この数字を信じるなら、ここ十年でとんでもなく豊かになってることじゃねえか！」

「恐るべきことです……」

しばしの間、沈黙が馬車の中を支配した。

「……グライム・ダイテスには王都で会ってるが、それほどの人物には見えなかったな」

「はい。善良だが凡庸。それがダイテス公を知る者の評価です。ダイテス公が当主となった頃には、たいした変化はありません。ここ十年ほどの変化です」

十年の間に何かあったとしか思えない。

「ふん、面白くなってきたじゃねえか。意外と退屈しねえかもな」

『戦神の寵児』とも謳われた元王太子は、不敵な笑みを浮かべた。



「パパン！ 結婚って、どういうことですか！ 聞いてませんよ！ 百歩譲って、それはおいとくとしても、相手が第一王子って！ ミリアーナには悪い予感しかしません！」

部屋の中の言い争いは、外まで聞こえていた。マティサを連れて扉の向こうに声をかけようとしたこの館の執事は、気の毒なことに凍りついている。主家の恥を、婿となる相手の前で晒してしまったのだ。無理もない。

きゃんきゃんと吠えるその声は若い。おそらくは、マティサの花嫁となるダイテスの令嬢だろう。それに答えるのは、舅となるダイテス公爵に違いない。

「ミリー、これは王命なのだよ。最初に婿が欲しいと言ったのはこちらだしね。ほら、ミリーは来年十九になっちゃうでしょ？ それにしても、まさか王太子様を廃嫡されて我が家にくださるとは」

あははははと渴いた笑いをもらすダイテス公爵。

十九だと、貴族の令嬢としては嫁ぎ遅れになる。今年うちに何がなんでも婿を、と意気込んでいて当然だ。だが、その相手に元王太子が選ばれるとは思いもなかったのだろう。

「パパン、現実逃避もたいがいにしてください！ どう考えても、後継者争いに敗れた王子様を押しつけられたとしか思えません！ 流刑地代わりです！ とりあえず辺境の領地に封じて、動きを抑えるつもりだとしか！」

「ほほう」

マティサは扉の前で唸った。この令嬢は、なかなか面白いことを言う。

「一体、王都はどうなってるんですか！」

鋭く切り込む令嬢に、父親はぼそぼそと返す。

「あうう、王妃様がね、どうも第二王子様を王太子に推しててね、第一王子様を廃嫡させちゃったんだよ」

気弱な声だ。マティサは未来の舅がなんとなく気の毒になる。

「は？ 第一王子も正妃腹でしたよね？」

「そうなんだけどね、なんか王妃様が第一王子様を嫌ってるみたいで……前々から廃嫡を訴えて、陛下がそれに折れちゃった感じ？」

「織田信長かつつ！ いやいや、伊達政宗？ そんなの、大人しくしているようならよし、何かあれば討ち取るつもりだとしかかつつ！ ミリアーナにはダイテスの滅亡フラグが見えます！」

「オーダノブナーガ？ ダティマサムウ？ メツボウフラグ？ 何それ？」

「織田信長と伊達政宗は遠い異国の武しよ……いえ、将です！ 二人とも弟と当主争いをして……まあ、どちらも勝って家を継ぎましたけど。それより陛下も陛下です！ マティサ殿下といえ

『戦神の寵児』と謳われ、敵からは『黒の魔将軍』と恐れられる将でしょう、それを手放すなんて！ オウミはカインに常に狙われているのですよ！ 内部で争っている場合ですか！」

「……」

扉の前でマティサは感心していた。オウミは大国ではあるが、決して安泰とはいえない。東の隣国カインが、虎視眈々とオウミの領土を狙っているからだ。西の隣国エチルは、王が他国への侵略を嫌っているで攻めてくる恐れはないが、カインだとそうはいかない。備えは怠れないのだ。「……マティサ殿下についていた兵はほとんど取り上げられて、今は新しい王太子の許にいるから……戦力的には衰えているわけでは……」

「甘いですわ！ パパン！ 頭がいきなりかわって『はい、そうですか』と、今までどおり動く軍勢がどこにいるのですか！ そもそも、誰もが同じように軍を動かせるわけではないのです！ だから、優れた指揮官は名将と呼ばれるのですわ。そのかわりが、初陣もすませていない第二王子にできるとお思いですか？ 数だけの問題じゃありません！」

軍とは人の集まりだ。頭の理不尽な交代で、なんの軋轢もないわけがない。いいところに目をつけている、とマティサは思った。

「でもね、下にいた人たちはそのまま残っているんだし、中には殿下と同じくらい名將と讃えられる人も……」

「ですからパパン、その軍勢がダイテス領を攻めてくる恐れがあると、ミリアーナは言っているのです！ 新王太子より人望のある廃王太子なんて、王妃派の陣営からしたら、目障りこの上ないで

しょう。命を狙われる恐れ大です！」

叫び声の後、盛大な溜息が聞こえた。

「そもそも我がダイテス領は、政権争いに敗れた王族が、王都から未開発の地に飛ばされたのが始まりですが……ああ、歴史は繰り返すということでしょうか」

「わかつてるじゃねえか」

マティサが扉を開けると、びくんつと小柄な影が飛び上がった。見事な黒髪の少女が、恐る恐る振り返る。顔立ちはそこそ整っているが目立つほどではない。並よりは上という程度。王宮で着飾った極上の美女を見慣れたマティサの目には、地味にうつる。

マティサが覗き込むと、少女は顔を引きつらせ、その大きな黒い瞳に怯えが浮かんだ。

「ふうん、親よりはものが見えてんじゃねえか。聡い女は嫌いじゃねえぜ」

「だ……誰？」

少女が聞いた。

「初めてお目にかかる。ダイテス公爵令嬢ミリアーナ殿？ 噂の婿だよ」

マティサの後ろでコシスが頭を下げた。

「申し訳ございません。到着したのでご挨拶をと思いましたが——」

「面白そうな話をしてたんでな。聞かれて困る話は、もっと小さい声でしな」

マティサが晒すと、ミリアーナは小さな体をいっそう縮こまらせた。

「ようこそ殿下。これが娘のミリアーナです。ミリーや、この方がマティサ殿下だよ」

取り繕うように、ダイテス公が互いを紹介した。

「よろしくな。後ろのはコシスだ。俺の右腕だよ」

「コシスと申します」

「カティラ子爵！ あなたがなぜここに！ 殿下の配下の者は取り上げられたはずでは！」

驚倒するグライムに、コシスは丁寧に説明した。

「家督は弟に譲りました。弟は新王太子についておりますので、カティラは新王太子の配下のままです。今のわたしは、ただの騎士。マティサ様に仕えるのに、なんの障害もありません」

マティサは困ったように言う。

「物好きなやつだよ。そのまま新王太子に仕えりゃいいのに、家を捨ててまでついてきやがった。

ダイテスで雇ってくれるか？」

婿養子となるマティサには、ダイテス領においてなんの権限もない。グライムに認めてもらわなければ、人ひとり雇うこともできないのだ。

「わたしは幼少より、マティサ様に仕えるよう言われてまいりました。我が君以外の誰をも主と仰ぐつもりはございません」

「……腹心……家を捨ててついて……忠臣……主従……下克上も可……萌えっ……」

隅で縮こまっていたミリアーナが、何やらぶつぶつ言っていた。マティサが尋ねる。

「なんだ？」

「いいんじゃないでしょうか？ 気心の知れた者の一人も欲しいでしょうし、カティラ子爵といえ

ば、数々の戦場でマティサ様の右腕として働いていたお方。この忠心を無下に^{むげ}にしては、公爵の名が廃^たりますわ」

ミリアーナが物凄い勢いでまくし立てた。目が輝いているのは気のせいだろうか？

「とはいえ、それほどのことはしてあげられません。人を雇い入れた時の相場に少し色をつけるぐらいしか……よろしいでしょうか？」

「はい。マティサ様に仕えられるのなら、いかようにも……」

そこでコシスは、そつとハンカチをミリアーナに手渡した。

「お使いください……□元が……」

「あ、あら。私としたことが」

ミリアーナはハンカチを受け取り、涎^{よだれ}をぬぐう。

グライムも承諾したので、『銀の守り刀』の二つ名を持つこの騎士を雇うこととなった。

「嬉しそうだな、嫁」

「嬉しいだなんて、そんな」

ミリアーナが視線をそらした。

「まあ、王都のやつらもそう簡単には攻めてこない。嫁が言ったとおり、カイナンの脅威があるからな。つまり、俺をとつとくのために『公爵家』によこしたわけだ」

婿養子という立場は、実に微妙だ。ダイテスに関する権限はすべて当主にあるため、代替わりするまでマティサには何も決められない。その上、有事^{ゆうじ}の際には国王の命によってミリアーナとの婚

姻関係を解消させられ、マティサは王都に呼び戻される。貴族として最高位の『公爵』であっても、『辺境』のダイテスならば簡単にいいなりにさせられるだろうという魂胆だ。

（実にあざといやり方だな、父^{おや}王）

「国内の貴族の中にも俺を惜しんでくれる者はいるから、大義名分がなきゃ、ここを攻めることもできん。それでも、万が一軍隊が攻めてきた時は兵を貸しな。俺とこいつがいれば、簡単には落ちん」

「……『戦神の寵児』と『銀の守り刀』がいてくださるとは心強いですわ……」

「ささ、ミリー、お前は明日の結婚式の仕度^{しな}があるだろう。部屋に戻りなさい」

「パパン、ミリアーナはダイテスの行く末が心配なのです。お話を聞いていいでしょうか？」

「戻りなさい。クラリサ、ミリーを部屋へ」

グライムが侍女らしき者を呼び、ミリアーナは部屋から連れ出された。

マティサは少し笑った。

心強いと言いながら、ミリアーナの表情には嫌悪が見えた。戦^{いくさ}を嫌っているのだろうか。

ダイテスは、これまで戦の舞台となったことがない。先程ミリアーナが言っていたとおり、政権争いに破れた王族の一人が臣下に下り、未開発の地に流されたのがダイテスの始まりだ。以降、誰からも注目されることはなかった。

繰り返されるカイナンとの戦いでも、ダイテスは一度も出陣を申し付けられていない。実戦経験のない軍はあてにならないからだ。

ダイテスはオウミの最北端。広さこそ小国並みにあるのだが、三方を山に囲まれ、南から攻め込まれたら逃げ場がない。立て籠もるにしても——それは外部からの援軍が期待できる時にしか使えない戦法だ。

最悪の場合の身の処し方くらいは心得ている。

「ああは言ったが、万が一の時は、俺の首ひとつで事がおさまるなら迷わずそうしてくれ」
マティサのその言葉に、忠実な腹心は一礼してから付け加えた。

「その時はお供いたします。我が君のおらぬ世に、未練はございません」
唇にかすかな笑みを浮かべ、マティサは呟いた。

「……物好きだな」



ミリアーナに結婚が言い渡されたのは、今日のことだ。そして明日、式を挙げるといふ。あまりの急展開に、ミリアーナはさらに混乱した。

しかも相手は『戦神の寵児』と謳われたマティサ殿下だという。

王太子を廃嫡して公爵家の婿養子に出すなど、正気の沙汰ではない。

カインとの大小の戦をへて、国内外で「オウミにその人あり」と知られた将。おまけに「加護持ち」だ。

この世界には魔力があふれている。人里離れた場所には魔力が凝り、様々な現象をもたらす。その現象は精霊によるものとされ、魔力が宿った石は精霊石と呼ばれる。「火」「風」など属性を持つ魔力が石にたまると、石は魔力が尽きるまでなんらかの現象を起こす。火の属性を持つものは熱を発し続け、風の属性を持つものは風を起こし続けるのだ。それを精霊力という。そして魔力は生き物にも宿り——人の場合、それを「加護持ち」という。魔力が精神に宿れば魔法という不思議を操ることができ、肉体に宿れば人間離れた能力を発揮する。

かつてその「加護」ゆえに自国を破滅へと導いた『狂王』がいた。マティサはその血を母から受け継いだ「加護持ち」。

いろいろと波乱を呼びそうだ。

「憂鬱だわ……」

「でもお嬢様、すっごい美形でしたわ。マティサ様」

ミリアーナの侍女クラリサが、うっとりと言う。ミリアーナは、自室の床にへたり込み、呟いた。
「うん、超美形。着飾っても、隣に立つ勇氣がないわ」
マティサの目を思い出し、女として大事な何かで負けたと思う。

「ああ、婿だなんて！ あんな人が？ あーりーえーないー！ ってゆーかあの人、婚約者いなかった？ 五、六年前に、そんな話聞いた覚えあるんですけどー！」

ダイテスは田舎だが、さすがに王族の話は入ってくる。マティサは他国の姫君と婚約していたはずだ。いつの間に、婚約解消したのだろう？ そういった話こそ最優先で入ってきそうなものなの

に、聞いた覚えはない。他国との婚姻は、いわば国同士の結びつきである。それを破棄して、公爵家に婿にやるとも思えない。それこそ前代未聞だ。ありえない。

「でもお嬢様も、もう十八。どうあつても結婚しなければならぬのなら、素敵な人でよかつたじゃないですか」

グライムはいつ結婚が決まってもいいように、ミリアーナの婚礼衣装をすでに用意させていたという。そこまで本気だったか、パパン！

「……今まで好き勝手できたのは、パパンが許してくれたからよ。でも、これからはそうもいかなくなるわ……」

貴族の女に求められるのは、跡継ぎを産むこと。そして政略の駒になることだ。

独身のうちは親のいいなりで、嫁げば夫に従い、老いては息子に継らなければならぬ。

女の意味など必要ないのだ。

「でも、ダイテスがこれほど豊かになったのはお嬢様のおかげですわ。お嬢様を蔑ろになど、できずがありません」

「いいえ、まだまだ足りないわよ！ 私の求めるものは、もっと多いのよ！」

ミリアーナが思い描く日常には、まだ追いついていない。以前、当たり前前に甘受していた生活のなんと豊かだったことか。

ギリギリと拳を握り締めたミリアーナは、ふっと力を抜いて呟いた。

「……ねえ、クラリサ……。廃嫡された失意の王太子。望まぬ婚姻に……家を捨ててついできた

幼馴染の忠臣って……なんか萌えない？」

ごくりとクラリサの喉が鳴った。

「お嬢様、その忠臣とは……あの銀髪の方ですか……」

黒髪に黒い瞳のマティサとは対照的に、コシスは銀髪にほとんど色のない水色の瞳をしていた。

背はわずかにコシスの方が高いだろうか。目つきは鋭いが、武人というよりは学者のような容貌で、高い知性がうかがえる。

「そうよ。充分というか、かなりの美形よね？」

「そ、それはもうっ！」

『銀の守り刀』のコシス・カティラ子爵！ マティサ様の右腕で……三つくらい年上のはずよ……幼少の頃からのご学友でっつ、家督を弟に譲ってついでくるなんて！

コシスはマティサを守る剣。盾ではなく、相手の喉元を掻っ切る刃。守りは粘り強く堅固で、攻撃に転じれば劫火のごとし。ついた二つ名は『銀の守り刀』。

「何この美味しい設定！ 神は私に萌え死ぬというの！ ネタにするしかないでしょう！」

「同感ですわ！ お嬢様！ これはもうっ、萌えるしかっつ！」

「あなたならわかってくれると思っていたわ！ 我が同志」

二人はがしつと手を取り合った。部屋に不気味な笑い声が響く。

「で、どちらでしょう？ コシス様が慰める方なのか、マティサ様が慰める方なのか」

「くっ、どちらもイケるわ。あの二人なら」

そこは、もはや他人が入り込めない異空間と化していた。

「幼馴染おとなしみに身分差とかつつ!! 何これ美味しい!!」

「プラトニックの執着盲目とかもありですわよね?」

「何それ、盲目的に執着して仕えるの? んで、一人で悶々もんもんと? 乙!おつ」

「すれ違いも好物ですわ!」

「でもマティサ様ヤンデレっぽくない? 誘い受けありでしょう?」

「コシス様って、絶対敬語ですわよね? 敬語攻めげな従者最高!!」

「コシスってなんか甘やかさそう、溺愛で!」



「あの子、ミリアーナは生まれた時から、少々変わった子でございました」

ミリアーナが部屋に戻ったあと、マティサとコシスは、グライムの話を聞いていた。

「手のかからないおとなしい子で、まるで、こちらの話していることはすべてわかっておるのではないかと思うぐらいでした。あの子が読み書きを完全に習得したのは、三つか四つの頃だったと記憶しております」

「……ずいぶん早いな」

覚え違いではないかとマティサは思った。にわかには信じられない。

「はい。字を教えてほしいと本人が言い出しまして、教えてみると、あつという間に覚えてしまいました。計算も、信じられないくらい速いのです」

その頃から、聞いたこともないような不思議な知識を語り出したというのだ。

「それは遠い異国の知識だというのが、娘が異国の者に出会う機会などないはずなのです。しかし事実、領地の誰も知らないことを、ミリアーナは知っていました」

最初は十年ほど前のことだという。とある湖の話を聞いたミリアーナは、どうしてもそこに行きたいとねだった。しぶしぶ連れて行ったところ、ミリアーナは高笑いをして叫んだ。

『どこからどう見ても死海しかいじゃない! お宝だわ!』

「我がダイテスには、死の湖と呼ばれる湖がございました。魚も住まぬ、まわりに緑も生えぬ湖で、何かの呪いがかかっているのではないかと、地元の人間からも忌避きひされておりました。ところがミリアーナが、あれは『しかい』だと言い出しまして——塩が作れるというのですよ。はるか昔、海の一部が陸地に取り残され、干上がっていったものだと」

『「えんこ」とは違うのですか?』

コシスが聞くと、グライムは頷うなずいた。

「広い『えんこ』を『しかい』というそうです。緑が生えぬのも、塩による被害のせいだと。試してみたところ本当に塩が作れまして、ダイテスは大いに潤うるいました」

それからグライムは、娘の行動を支援することにしたそうだ。娘は塩の製造のみならず、農業や工業にも手を出した。

「その結果、ダイテスは作物が豊かに実り、その実りを無駄にしないだけの技術が発達しました。他にも画期的な技術が生まれ、そのすべては、ここでは言い尽くせませぬ」

「……ではここ十年のダイテスの成長は、ご令嬢の力だと？」

コシスの問いに、グライムは頷く。

「そのとおりでございます。貴族の娘として恐れ多くも王太子であらせられたマティサ殿下に従うべきかと存じますが、できますれば多少、娘の勝手を許してやってくださいませぬか？ 娘は殿下のお力になれるはずですよ」

「面白いな……」

マティサは妻となる娘に興味をそそられた。

最初はそこいらの貴族の子女にはない、政治に対する見解に感心するだけだったが、あの娘はそれだけではないらしい。小さな体にどれだけの秘密を詰め込んでいるものか。

「気に入った。あの娘、確かに俺がもらった」

翌日、結婚式が行われる。

礼服を着た元王太子は、立派で堂々としていた。

その隣に立つ姫君は精一杯の化粧を施し、美しい衣装をまとっていたが、終始顔が引きつっていた。

美貌の花婿と可愛らしい花嫁の式は、つつがなく終わった。



結婚式のあと、自身の十八年に及ぶ秘密——前世の記憶を持つことをマティサに打ち明けたミアーナは、その日のうちに名実ともに人妻になった。

翌日、ミアーナが目覚めると、すでに日は高くなっていた。

「お嬢様、お目覚めですか？」

クラリサが声をかけてきた。

「今何時頃？」

「お昼を過ぎておりますわ。その……マティサ様が、疲れているだろうから寝かせておいてくれと……」

頬を赤らめつつも、きらきらと瞳を輝かせるクラリサ。

ミアーナは昨夜のことを思い出し、飛び起きた。

「金庫持ってきて！ 金庫！ 黒歴史を封印するわっっ！」

「どうなさいました、お嬢様？」

「……読まれた……」

精神的なダメージと昨晚の疲労が今さらながらに襲ってきて、ミアーナはうなだれた。

「おじよ……」

「につ、二度と読ませないわよ……クラリサ、私の本が嬢様に渡らないよう、皆に厳命して」
「お嬢様の本を！ それはつつ、皆に伝えます」

ミリアーナの本は、一部の愛好者のみが入手できるものなのだ。BL本オンリーなので、おおうひらにはできない。所有者は秘蔵している。

ちなみにその内容には、初心者向き、中級者向き、上級者向きがある。

「わつつ、私は、ここで挫けるわけにはいかないのよ！ 私には大いなる目標がつつ！」

そもそもこの世界では、文字を読める者が少ない。紙の生産量もまだまだ少ない。前の世界のように、誰もが娯楽で本を読めるようになるまでの道は遠く険しい。

「もちろんですわ。わたくしは、お嬢様の目指すものを、全力で応援いたします！」

「クラリサ！」

主従を越えた絆で結ばれた二人は、しっかりと抱擁し合った。

昼を過ぎていたので、ミリアーナはクラリサに軽食を頼んで食堂にやって来た。

そこにはマティサがいて、羊皮紙の書類に目を通していた。紙の書類ではないということは、ダイテスの外で作られた書類だろう。ダイテス領内の書類は、すべて紙で作られているのだ。

傍らにはコシスが控え、いくつかの書類を見比べて難しい顔をしていた。

「何をしているんですか？」

「嫁か。いや、領地のことを把握しておこうと思ってな」

マティサにはまだ執務室がない。それにしてもこんな場所ですか？ と思ってたミリアーナが尋ねると、

朝食をすませたマティサが動くのを面倒くさがり、椅子と机のある食堂で間に合わせていたらしい。

ともあれ、マティサは真面目に、ダイテスの統治を考えているようだ。

「その書類は？」

「コシスが調べた領地の資料だ」

「……それ、あんまり役に立ちませんよ」

マティサが顔を上げる。その時食事が運ばれてきて、ミリアーナは書類を汚さないよう、マティサから離れた席について食べ始めた。

「どういう意味だ？」

「情報を制限している、という意味です」

ミリアーナは答えてから、口の中に食べ物を放り込む。

（まあ、いいか。夫婦だもん。一蓮托生よね。いずれわかることだし——なら、秘密を話して嬢様がどう出るか、賭けてみるのもひとつの手よね）

マティサは惜しげもなく手に持っていた書類を放った。慌ててコシスが集める。

「だろうな。数字をごまかしているとは思わんが、跳ね上がり方がとんでもねえ。こうなった理由を隠しているという訳か？ なぜ、隠す？」

「歴史が変わるからです」

さらりと放たれた言葉に、マティサが眉をひそめた。

「嫁え……」

「誇張しているわけじゃありませんよ。言葉を変えます。その理由が歴史を変えると、知っているからです」

「……もうひとつの世界に関する何か？」

「コシスも同席しているが、構わないだろう。」

「そうです。実際、あちらでは歴史が変わりました」

「ミリアーナは食事を終えた。コシスを見やると不思議そうな顔はしていたが、「もうひとつの世界」について、ここで尋ねる気はないようだ。ミリアーナは続ける。

「たとえば……今私の食べていたものは保存食です。これはどのくらい持つと思いますか？」

「さあ……煮た料理だったよな。保存食を調理してるのか？」

「湯煎で温めて、容器から出しただけですわ。これは三年持ちます。温めなくても、直接容器から食べられます」

「マティサの顔色が変わった。コシスも驚愕の色を浮かべてミリアーナを見ていた。

「三年……だど？ 料理の形で？ それは大量に生産可能なのか？」

「ミリアーナの唇がほころぶ。

「さすが武人。気づきましたか」

「マティサもコシスも名将と呼ばれている。だからこそ、その意味にすぐ気づいたのだろう。」

「ああ、悪い……舐めてたわ。嫁が言ったとおりだ。確かに歴史が変わる、そいつが外に出た

らな」

「マティサが無造作に前髪をかきあげる。

「おそらく、兵糧として使われる」

「そうでしょうね。この保存食は『缶詰』といいます。もともと軍の食料——兵糧として作られたものですわ。保存が利いて持ち運びしやすく、すぐに食べられる。非常食としても重宝されておりました。現代のコンバットレーション……兵糧ですわね、それにも使われ続けている品物ですわ」

「こんぱつとれーしょん？ なんだ、それは？」

「……ともかく、兵糧の不足は軍の足枷のひとつですわ。それを解消できるものがあつたら——あとはわかりますわよね？」

「軍を養うには、大量の食料がいる。戦ともなれば、戦線に物資を送る労力もあるし、保存技術が進んでいないこの世界では、運んでいる間に食料が傷むことも多い。調理するにも手間と燃料がいる。場合によっては食料を現地調達しなければならぬが、それすらままならない時もある。

古今東西、飢えた軍が勝つたためしはない。背水の陣で挑んで一時勝つたとしても、補給が追いつかねば、いつかその優位は崩れる。兵糧が不足したために起きた悲劇は、数限りない。

それはミリアーナが前世の歴史で学んだことだ。

「兵糧の問題がなくなれば、無駄な遠征を言い出す馬鹿が出てくるな。それはそうと——嫁、なんで女の身でそこまでわかる？ 舅はそんな教育をした覚えはないと言っていたが」

「常識でしょう？」

「……全員がそう思ってくれたら、楽なんだがなあ」

誰かを思い出したのか、マティサが溜息をついた。

マティサはお飾りの将ではない。実質、軍を率いる優秀な指揮官であったのだ。先陣をきって戦っていたことは、その身に刻まれていた大小の傷でミリアーナにもわかった。

「なんでばらした？」

「婿様と私は、もう運命共同体です。下手な隠し立ては、いつか何かあった時に致命傷になりかねません。婿様にはダイテスのすべてを教えます」

「いい子だ」

マティサが不敵に笑った。

「いいぞ。で、どこから教えてもらえるんだ？」

「そうですね、どこから話しましょうか……この城があるセタはダイテスの玄関口と言われているんですが、実は対外用に情報規制している街です。真のダイテスの姿は——百聞は一見にしかずといいます。視察なさってもらった方がいいでしょうね」

ミリアーナはクラリサを呼んだ。

「クラリサ、婿様と各施設に視察に行こうと思うの。責任者に通達しておいて。今日はもう遅いし、明日からね」

「日程はいかがなさいますか？」

「一番近い駅から『蒸気機関車』に乗って——まず『治水設備』からね。それから『農場』を見て、

『缶詰工場』と『織物工場』、『温泉熱利用ハウス』にも行くわよ。あとは状況次第かしら？」

「よろしいのですか？」

「隠していても仕方ないでしょう。パパンには私から言っておくわ」

「かしこまりました」

クラリサが一礼して下がった。

「……今言っていたのがダイテスの『秘密』か？」

「まだありますけど、私の知っている原理と技術の知識をその道の第一人者に教えて、開発してもらったものの一部ですわ」

コシスが尋ねた。

「通達はどのぐらいで行き届きますか？ ダイテスは広大なので、おいそれとは——」

「通達だけなら、ダイテスの端から端まで一日もかかりませんわ」

マティサとコシスがミリアーナを凝視した。二人の言いたいことはミリアーナにもわかっている。伝令を使うと、そんな短時間では伝わらない。

「嫁——」

「これも、歴史が変わりますわね。外に出れば」

視察の申し入れを、グライムはあっさり許可した。

「うんうん、夫婦というのは、互いに対する理解が大事だと思うよ。なんといつても急な結婚だっ

たからねえ。それに、政略結婚だし。旅の間にゆつくりとお互いのことを知っていていけるし、将来のためにもなるよね。いいよ、行つておいでミリー。仲良くするんだよ」

ミリアーナは思わず、慈愛あふれるグライムの笑顔から視線を外した。

パパンは何かを誤解している。それも、いい方向に。自分の娘に夢を見ているのだ。あえて指摘するまでもないので、黙っておくが。

親の夢は壊さない方がいい。結婚の前日まで顔を合わせたこともなかったという、由緒正しき政略結婚であるのは事実なのだから、仲を深めるためということにしておこう。

夕食をはさんで、ミリアーナはダイテスの抱える技術についての説明が続けたが、途中ですっかり疲れてしまったので、その日の話は終了した。

マティサは頭痛をこらえるように、片手で額をおさえていた。

コシスは珍しく、ぐったりと椅子に体を投げ出している。

呻くように、マティサが呟いた。

「……天の采配かよ？ よくもまあ、ここに俺をよこしたものだ。クソ婆に感謝するぜ」

くくくと喉を鳴らしてマティサは晒す。

「……おそらく、王都の人間はダイテスの実態を知らないのでしょうか……辺境の地としか思っていないか……」

自分もそうだったと、コシスが言う。

「あとは現地を見ながら、おいおい説明していくということ。では、私はもう休ませてもらいます。明日は早いですし」

それだけ言うと、ミリアーナは夫婦の寝室ではなく、独身時代から使っていた自分の部屋に戻ろうとして――捕獲された。

気がつけば、マティサの肩に荷物のように担がれている。

「ほえ？」

（――いったい、私の身に何が起きたのでしょうか？）

ミリアーナは思わず、どこかの誰かに心の中で尋ねた。

「む、婿様？」

「今夜も、婿の義務を果たしてやるよ」

「むこのぎむって何？」

硬直するミリアーナ。

「いずれ家を継ぐことと、跡継ぎを作ることだ」

外からとつた婿に求めるものは、確かにその二つである。

「とつとと孕ませてやんぜ」

「いやーっっ!! 放してー!!」

ミリアーナは暴れたが、マティサはびくともしない。

「痛いもんっ！ 痛いんだもん！ 苦しいもん！ やだああああ！ 明日起きられなくなるー！」

「手加減してやる」

「嘘だ！ 昨日だって、加減してやるって言ったくせに朝までー!!」

「安心しろ、起きられる程度にしてやる」

暴れるミリアーナとコシスの目が合った。

助けてっ！ との思いを込めてコシスを凝視すれば、微妙に視線をそらされた。それから思い直したようにコシスがミリアーナと目を合わせ――

「ご健闘を」

「何に!!」

激励された。なぜだ。

遅しいマテイサはミリアーナの抵抗などものともせず、夫婦の寝室に連行したのだった。

「獣ー!!」

「男は皆そうだぜ」



オウミは大国だが、安泰とは言いがたい。東にカイン、西にエチルという大国があり、南にハヤサという中堅の国がある。この三国の王はいずれも力づくで王になった、王級の「加護持ち」である。

「加護持ち」の能力は個人差が大きい。王級とはいうが、それは王になれるぐらいの力の持ち主、という大雑把な区別にすぎない。

カインの現王は、父王を追放した。エチルの現王は、兄王を打ち倒した。ハヤサの王は生家である主家を滅ぼし、新たな国を起こした。

カインの王は『強欲王』。名高き色魔である。王族には側室の二人や三人、寵童の二人や三人いて当たり前だが、それでもなお色魔と言われるとは、どれだけお盛んなのか。

エチルの王は『無敗王』。他の王と同じく血族から王位を奪っていても、『慈悲深き』という冠がつくのは人徳の差であろう。

ハヤサの王は『虐殺人形』。ハヤサを起こす際に、親兄弟を皆殺しにしている。それ以前からの残酷な所業もあわせての『虐殺』。ハヤサは規模こそ中堅だが、その戦闘力は大国と差がない。王の他もう一人「加護持ち」がいるからだ。

オウミはハヤサと同盟を結んでいるが、他の二国とは結んでいない。そして、特にカインとは過去何度も戦っていた。

他にも西南や東南に小中の国がある。東南の小国は、実質カインの属国だ。

西の領主や周辺国は無駄な戦を嫌うエチルをはばかり戦はしないが、東はそうはいかない。カインは当然のように領主らを駆り出して他国に戦を仕向け、自国で不足している食料を奪おうとする。おかげで、オウミの東の領主は猛者ぞろいである。

南の領主は、どちらかというと商人のような気質だ。ハヤサをはじめとして、各地との交易を盛

んにしている。

西は——かつてオウミの西にあったのは、元は王妃リサーナの生国であった。リサーナの父であった王は強力な“加護持ち”だったが——何かのきっかけで“加護持ち”特有の『キレた』と言われる暴走状態に陥り、自らの国を滅ぼした。『キレた』状態になると、“加護持ち”は通常の数倍の力を振るい、衝動に任せてあたりを破壊しつくす。

国の中枢部すべてを手にかけてもまだおさまらぬ舅に、オウミのユティアス王はその『狂王』を討つ決意をした。『キレた』反動の“活力切れ”を狙って舅を討ち、そのまま国を併呑したのである。王族唯一の生き残りリサーナの夫ということで、亡国の領主たちもこれを受け入れた。そういった経緯もあって、オウミの西の領主たちは王妃を支援している。

ユティアスが『狂王』を討ったのが二十三年ほど前のことで、当時リサーナは妊娠していた。後に生まれたのがマティサである。当年二十二歳、王級“加護持ち”であるとは、なんの皮肉か。マティサに『狂王』の面影を見る者もいる。

王妃がマティサを嫌うのは、それが理由なのだろう。

東、南、西の三方を強国に囲まれたオウミだが、北には竜骨と呼ばれる山脈があり、この方面から攻められる恐れはない。この世界の軍の装備では、ここを乗り越えて戦を仕掛けることは不可能なのだ。高く険しい山々に、三方を囲まれた辺境。政権争いに破れたミリアーナの先祖が、開拓して来いと放り込まれた場所である。

ダイテスで唯一、外と接している街がセタである。ゆえにミリアーナは、セタにはあえて列車を

通さなかった。セタから最も近い“駅”がある街ダインまでは、徒歩で一日はかかる距離である。

もっともそれは徒歩ならばの話だが——



耳に響く鋭い笛の音。その巨体は、あえてたとえるのなら鉄の馬車だろうか？ しかし、馬はもちろぬいない。通常の馬車よりもはるかに長いそれが、六つも連なっている。先頭のものには、大きな煙突がついていた。

ミリアーナの旅装の裾が、噴出された蒸気にはためく。

「これが蒸気機関車です。線路——地面に敷かれた二本の鉄の線が見えますよね？ その上を走る乗り物です。精霊力だけでは実現不可能だったハイパワーを、蒸気力で再現しました。熱源には、火の精霊石を複数使用しております。線路はセタ以外のダイテス領内を繋いでいまして、流通の要となっています」

駅のホームに佇むミリアーナが、ざっと説明した。

それを聞くマティサとコシスの顔色は悪い。

乗り物酔いだ。

二人は今朝、セタから“駅”がある隣街ダインまで行くため、“自動車”に乘せられた。これは馬なしで走る馬車のようなものだ。ミリアーナ曰く、



『精霊力のみ利用して内部燃焼動力を使っておりません。電気自動車のごとく静かでCO₂も発生せず、とつてもエコ』

「だそうだ。知らない単語を羅列されても困る。内部に動力を増幅させる仕組みがあり、それで車輪を動かしているというが、マティサは完全には理解できなかった。」

その自動車はクラリサという、少し背が高い、栗色の髪の楚々とした美女が動かしていた。説明された時には、一時間で四十キロから五十キロ、休みもなく走りきれるとはなんの冗談かと思っただが——冗談ではなかった。

自動車は街道を突っ走り、あれよあれよという間にダイインについた。

街道はよく整備されていたのだが、馬車とはまた違った振動に、初めて乗る二人は気分が悪くなった。

「二人とも、早く客車に乗ってください。これは発車時刻が決まっていますから」

「嫁、ひとつ疑問なのだが」

「なんですか？」

「なぜ平民にここまで知識が得られる？ 俺が為政者ならばこんなにすごい技術は秘匿するぞ」

「まあ、前世にも国家機密ぐらいはありましたよ。だけど、こんな時代遅れの技術は公開されましたから」

マティサは目を見張った。

「時代遅れ……なのか？」

「ええ。こんなの博物館に行けば詳細や図面が展示されていましたし、自動車の内部構造だって免許をとる時に教えられました。このくらいは誰でも知っています。その気になればいくらでも調べられました」

「図面？」

「設計図みたいなものです。そもそも発明というのはひらめきが命みたいなもので、正解にたどり着くまでは手探りで時間がかかるんですよ。ですが正解を知っていれば、複製を作るのにそう時間はかかりません」

「書いたのか？ その図面を」

「もちろんです。それをよりよくしてくれたのは技術者であって、私じゃありませんけど」

「ミリアーナはそう言っつて、汽車に乗り込んだ。小さな背を見送り、マティサは腹心に尋ねた。

「……コシス、おまえ十数年前に見ただけの図面を書けるか？」

「いえ、無理だと思えますが……」

「……そういうことかよ……なるほどな……」

マティサが苦笑していると、ひよこつとミリアーナが窓から顔を出した。

「婿様、出ちやいますよ、早く乗ってください」

「わかった」

促されて、マティサとコシスも汽車に乗り込む。中にはいくつもの席があり、多くの人が座つ

ていた。個室が用意されていたので、二人はそこに腰かける。むろん、クラリサも同乗していた。

「嫁、水蒸気とは湯気のことだったな？ そんなものに、これだけの人と物を積んだ車両を、動かす力があるのか？」

「あります。百聞は一見にしかず。体験なさってください」

マティサは唸り、顔を掌で覆った。

どのくらいの速さで蒸気機関車が走るのかは知らないが、自動車と同じ程度の速さでこれだけの人と荷を運べるのだとしたら――

「嫁え、何度も言うようだが――」

『歴史が変わり』ますよ

当たり前のようにミリアーナがいう。

「一人でどれだけ文明進めるつもりだ？」

「さあ？ 何百年でしょうか？ ただ、変わってくれないとこつちが困るんです。それがあれば人が助かるとわかっているのに、黙っているのが辛かったですよね」



ミリアーナはふと昔のことを思い出した。

ミリアーナが幼い頃、ダイテスは貧しかった。飢えで死ぬ人々もいた。それを助けるには、ダイ

テスを豊かにするしかない。塩をきつかけに資金を得て、ミリアーナはこの世界にまだない技術、再現させることにした。幸いダイテスには戦への出陣要請はこない。資金はすべて技術開発にまわせる。

水害や干害に備えての治水工事。鉄の鉱脈が発見されたのをきつかけに、各種鉄製道具などを開発させた。中世期レベルだった鉄の精製にはかなりの改革が必要だったが。

さすがに農耕機——トラクターはどうかとも思ったが、農家というのは前世でもきつい、儲からないと言われていた。多少前世の英知の恩恵に与つても、罰は当たらないはずだ。

産業を発達させれば、流通を担う自動車や道具などの開発も必要不可欠であり、輸送する農産物の保存法も考えなければならなかった。

情報の伝達速度を速めるために電話を作り、必要にかられて風力発電機を作り、電気を溜めておくための蓄電機を作った。

目指すは餓死者ゼロである。

気がつけば、技術の産物ほとんどもない数となっていた。

今はまだ辺境と侮られているため、情報の遮断や輸出品の規制もできるが——これからはそうもいかないだろう。

マティサが婿養子として来たことで、ダイテスは嫌でも注目される。その流れで、『異世界の知識』の産物が流出する可能性が出てくる。

それはとても危険だ。

文明の発達がしでかしたことを、ミリアーナは前世の記憶によって知っている。

これらの産物がたとえ外に出るとしても、ある程度は制御しなければ物騒だ。

汽笛を鳴らし、汽車が動き出した。

「嫁、今までは『軍事に転用すれば』『歴史を変える』ものばかりだったが、直接的に戦を変えるものもあるんじゃないか？」

「武器ですか？ 火薬武器というものを作ってみました——『変える』度合いが半端じゃないんで、秘匿しています。一部でよろしければ、視察の最後にお見せしますよ」

「かやく？」

「……硬い岩盤を崩すために作ったんです……あとは、用心のために」

持ち運びの容易ではない武器を作らせた。それはダイテス領内の岩に設置しているのだが——無用の長物であってくれたほうがいい。

「浮かない顔だな、嫁」

「兵器の開発は本意じゃないです。前の世界では、一発で数万人焼き尽くせる代物も作られました」

さすがのマティサも、目を見張る。

「すう……まん？ ……本気か？」

「本気です。それをここで作るほど、落ちてないつもりですけどね」

被爆国で生まれた元日本人としては、この世界に核を持ち込むつもりはないのである。もっとも、

それだけの技術もないのだが。
汽車はダイテス領内を順調に走っていった。

この大陸で広く栽培されているのは小麦だ。しかし、ダイテス領には小麦を作るのに向いていない場所もある。そうしたところで暮らす人々は別の作物を作り、それを売って小麦を買う。その流通は蒸気機関車が担^{にな}う。

葡萄^{ぶどう}を専門的に栽培して酒を作る。畜産に必要な大量の牧草を作るべく農耕機が走り回る。綿花が栽培され、効率のよい自動織機が綿の織物を作り上げていく。

そうした光景を目にするたび、マテイサは何度もこの言葉を口にした。

「どれだけ歴史変えるつもりだ、嫁！」

「私の目標が叶うまでです！」

「お前の目標と言うのはB.L本^あだろうが。志^{こころざし}が高いのか低いのかわからんな」

「大事なことでしよう！」

「いや、あれは全力で闇に葬^{ほうむ}り去るべきだ！」



視察はもちろん一日では終わらない。蒸気機関車は思いのほか速く、ダイテスの端から端まで行

くだけなら一日もかからないようだが、見てまわるところがとにかく多い。その日その日で宿をとるのだが、マテイサとコシスは驚きの連続で毎晩ぐったりしていた。

それでも手配してもらった資料にはしっかりと目を通していている。二人とも領地経営の経験はあるので、理解できるところもあるが――

「冬でも温泉の熱を利用して、季節違いの作物を育てられるとは驚きです」

「まったくなあ……数字が跳ね上がるわけだけ。異世界の知識か……計り知れん価値がある。あの嫁は――ダイテスはとんでもない火種^{あな}だな」

辺境^{あき}と侮^{あな}っていたダイテスの実態は、魔境^まだった。どの技術でも、流出すれば世界が変わる。オーバーテクノロジート、それをもたらしたミリアーナ。どちらも危険極まりない。

「特大の火種^{あな}ですね」

「ああ。嫁がその気になったら、国が取れるぞ」

「我が君の名声^{なせう}が加われば、確実に取れますね」

さらりとコシスが不穏なことを言う。

「真顔で冗談^{冗談}言うな」

「冗談に聞こえましたか？」

マテイサが顔を上げた。

「コシス」

「お方は、その気にはなりませんまい」